●事例紹介●

山形大学のＦＤ活動

小田　隆治
（山形大学　地域教育文化学部　高等教育研究企画センター　教授）

はじめに

二〇〇八年七月二〇日に読売新聞が掲載した『大学の実力　教育力向上への取り組み』の全国調査において、「ＦＤに関する取り組みでモデルにしている、または参考にしている大学」の項目で、山形大学が東日本の一位となった。また、「教育力向上への取り組みで注目、評価している大学」においても東日本で二位となった。これは委員会で決めた順位ではなく、各大学が回答した数の集計による順位なので、全国の大学から支持あるいは注目されていることを直接反映したものとして、ＦＤを担当している筆者は躊躇しながらも素直に喜んでいる。

どうして山形大学のＦＤは全国の注目を浴び、評価されているのであろうか。読売新聞によると「東日本の大学をつないだＦＤネットワーク〝つばさ〟（以下〝つばさ〟と省略）をつくり、蓄積したノウハウを公開する姿勢が評価されたようだ」ということだ。

本稿は、山形大学が推進してきたＦＤと〝つばさ〟を概観する。

山形大学の教養教育のＦＤ活動

山形大学は六学部を擁し、大学院生を含めた学生数およそ一万人の中規模総合大学である。六つの学部は山形市・米沢市・鶴岡市に分かれて存在し、地域分散型の典型的なタコ足大学である。この地域分散型キャンパスが良きにつけ悪しきにつけ山形大学の大きな特徴となっている。良い点は、県内に分散した学部がそれぞれの地域と連携して教育・研究を発展させていることである。問題点は、分散していることによって大学全体としての一体感を確保しづらいところにある。

すべての学生は入学後一年間、山形市にある小白川キャンパスで全学共通教育の教養教育を履修することになっている。教養教育は全学出動態勢をとっており、基本的に全学部の教員が担当することになっている。

教育改善や授業改善のＦＤはそれぞれの学部で独自に取り組んでいるが、筆者が関わっているのは教養教育のＦＤである。そしてこの教養教育のＦＤで蓄積したノウハウが「地域ネットワークＦＤ〝樹氷〟」（以下、〝樹氷〟と省略）や〝つばさ〟に展開されていった。

山形大学の教養教育のＦＤは一九九九年に始まった。この年に講演会と分科会からなる「ＦＤワークショップ」が開始され、それは以後今日に至るまで毎年実施され、今年で一〇回目となった。この年には全国のＦＤ先進大学の調査も大々的に行われた。

当時のＦＤを担当する委員会は「教養教育研究委員会」で、各学部から選出された教員が一名ずつ参加する小さな会であった。現在、これは「教育方法等改善専門部会」という名称に変わっている。部会長は教育担当の理事・副学長である。構成員の数は一九九九年当時とほとんど変わっていない。

委員会制度は学部との連絡・調整に有効であるが、継続性と専門性の深まりに自ずと限界がある。そこで二〇〇四年に「高等教育研究企画センター」を設置し、筆者も兼担として所属している。二〇〇六年に専任教員を採用してセンターの自立を図っている。

筆者は二〇〇〇年から教養教育研究委員会に所属し、今日までずっとＦＤに関わってきた。二〇〇〇年に「学生による授業評価」と「公開授業と検討会」を、二〇〇一年に「ＦＤ合宿セミナー」を開始し、現在まで継続している。それ以外にも「ＦＤシンポジウム」の実施や授業改善の冊

子『あっとおどろく授業改善』の発行、「学生主体型授業の研究」など様々な活動を展開してきた。

山形大学のＦＤは当初より「相互研鑽」の理念の下に、既存の授業の改善を主目的として、次のように毎年ＰＤＣＡサイクルが回るように設計した。Plan：年度当初に委員会で一年間の計画を決定する。Do：ＦＤ事業を実施する。Check：ポストアンケート等によって各ＦＤ事業を評価点検する。Action：委員会が発行する『ＦＤ報告書』[1]によって年間のＦＤ事業を組織的に見直し、改善を図る。

山形大学のＦＤの最大の特色は、「相互研鑽」という理念の具現化としてのＦＤの全面的な公開と共有化にある。それは学内の教員に留まらず、「ＦＤワークショップ」や「ＦＤ合宿セミナー」等の研修会の他大学への開放はもとより、「学生による授業評価」の結果や「公開授業と検討会」の他大学への公開、そしてこれらの活動を網羅した『ＦＤ報告書』の全国の大学への配布、というように徹底している。こうした実績を基盤として、後の〝樹氷〟や〝つばさ〟という大学間連携へスムーズに展開していった。

個々の教員の授業改善は、基本的に次のステップを踏んで進めることを企図している。①「学生による授業評価」によって自分の授業を客観的に見つめ直す。②自助努力によって改善する。③「公開授業と検討会」で同僚の力を借りて改善を進める。④以上で満足に改善が進まない場合は「個別支援型ＦＤ」によって専門家の力を借りる。⑤改善されたかどうかを「学生による授業評価」で点検する。こうしたサイクル以外に教育改善を進めるために、⑥「ＦＤ合宿セミナー」のトレーニングによって授業設計や授業スキルを身につける。⑦「ＦＤワークショップ」の講演会を通して国内外のＦＤの先進事例を学ぶ。

次に、本学の授業改善の中核を占めている「学生による授業評価」と「公開授業と検討会」について若干詳しく触れることにしよう。

学生による授業評価

ＦＤの中で「学生による授業評価」はかなり古い歴史を持つ。先の読売新聞の調査によると、回答した四九九大学の内九六％の大学で実施していることが判明した。日本の大学に「学生による授業評価」はそれなりに定着していることが分かる。だが、様々な大学の教員たちから「学生による授業評価」はあてにならない、という言葉を耳にする。一方で、読売新聞の結果からは数あるＦＤ活動の中でこれが授業改善に役立つという回答がもっとも多かった。実際にどのように役立てられているのかは分からない。

筆者も学会や研究会で「学生による授業評価」の文句をよく聞くことがある。しかし、分かってきたことは、その文句を言っている大学の「学生による授業評価」と山形大学のそれとは内容や性格が大きく異なっており、同じ土俵で論じることができないということである。往々にして、「学生による授業評価」に批判的な人たちは、どこでも同じことが行われているように考えているようだ。

「学生による授業評価」に批判的な人たちの意見には、これが教員の個人評価に活用されるという点にある。大学の教員管理の一方策だと言うのである。現在の大学を取り巻く状況下で、こうした懸念を完全に払拭することはできない。確かに管理は強化されているからだ。そこで、山形大学では二〇〇〇年以来、「学生による授業評価」を授業改善のためだけに利用することを宣言している。実際、山形大学では「学生による授業評価」を「学生による授業改善アンケート」と称している。しかし、未来永劫教員の個人評価に使わないと言っているわけではない。万が一使う時が来たら、事前にそのように伝えることになる。大学（もちろん一般社会でも）はフェアであることが大切なのだ。

「学生による授業評価」を授業改善に有効なものとするためにはどうしたらいいのだろうか。他のＦＤ事業と同様に、我々ＦＤを担当する者たちに突きつけられている課題はこのことに尽きる。先行事例を研究するうちに、アンケート項目それ自体の設定はそれ程問題なく進んだ。最も重要な鍵はアンケート結果の表示方法と公開の仕方にあることが分かってきた。そして、それらが学内で認知され、翌年度以降継続性のあるものにならなければならない。そのためにも始めが肝心である。

授業の改善を進める主体はどこまで行っても個々の教員である。教員の中には、自分の授業を改善するために以前から個別に学生から意見を聴取している人たちもいる。たまに勘違いされることだが、組織的な営為であるＦＤは個人的な授業改善の取組みを否定しない。反対に、個人的な取組みを公開してもらい、大学の資産として共有化していく作業こそがＦＤなのだ。それにしても、個人が実施しているアンケートと組織的に行う「学生による授業評価」とは違った性格を持たなければ意味がない。組織的であり、それゆえ最大公約数的にならざるを得ない「学生による授業評価」は、個人の授業のディーテールを突き詰めること

はできない。

そこで組織の中での各個人の位置付けが分かる山形大学独自の集計表を考案した。山形大学で実施している授業は、山形大学の学生にのみ意味を持っている。それがたとえ東京大学の学生の能力を伸ばす内容であっても、山形大学の学生に理解されないものであっては何の意味もない。そして、たくさんの授業を履修している学生にとって、履修科目の中で各授業が相対的にどのように評価されているのかということを、個人的かつ組織的に把握することは重要な意味を持つ。こうして、各学期にＡ４用紙七枚に教養教育の全授業およそ四〇〇科目の評価結果が表されるようにした。これは『ＦＤ報告書』やホームページ[2]でも公開しているので、興味のある方はそれをご覧になっていただきたい。

「学生による授業評価」を行っても、結果を授業者に公表しない大学があることを聞くことがある。学部長だけがそのデータを握っていて授業改善が進んでいくのだろうか。ＦＤが組織的な営為であることから、みんなで同じ情報を共有して、開かれたかたちで議論を進めることが肝要ではなかろうか。山形大学では、「学生による授業評価」の結果を教員のみならず学生にも公開している。

この「学生による授業評価」を開始した初年度には、学生と同じアンケートを教員にも実施したが、その結果が学生の結果とほとんど一致していた。教員の自己認識が学生の評価と乖離していなかったのだ。もしこれが乖離していたならば、「学生による授業評価」を授業改善のツールとして利用することは困難であったかも知れない。

山形大学では、「学生による授業評価」のアンケート項目と集計結果表を二〇〇〇年以来ほとんど変えずに実施してきた。データが蓄積することによって、改善してきた授業や改善しづらい授業が見えてきた。このように「学生による授業評価」のデータは本学の大きな教育資産となっている。

「学生による授業評価」は一方通行ではない。この結果を受けて、教員のアンケートを実施し、その結果を『ＦＤ報告書』の中に公表している。このように、学生と教員の双方向性を確保している。

公開授業と検討会

授業の改善は、その現場を直接見ることによってしか行うことはできない。それを嫌がって他の手段をとると、それはかなり遠回りな作業となる。学生は授業を受けているのであって、単に教科書や資料を読んでいるのではない。学生と同じ立場に立った授業改善の方法は、授業そのものに立ち会うしかないのだ。

「学生による授業評価」は、残念ながらどこまで行っても学生の満足度調査の域を越えない。満足度は確かに重要なことであるが、教育が満足感を得たり、与えたりするものだけでないことも明らかである。学生が当初望んでいなくとも、かれらの想像以上の地点まで引っ張り上げなくてはならないことも確かなのだ。これが教育の使命である。

専門性に依拠した大学の教育では、それぞれの教員が袋小路に入って授業の独自性を盾に、眼前の学生の意欲や能力、性格を無視した授業が展開されることもあるようだ。しかし、それでは教育の使命を果たしていることにはならない。目の前の学生が理解したかどうかが問われているのだ。そこには内容と共に教授法（教え方）が重要な意味を持っている。このことが学生を主役に据えた授業改善なのである。

授業を公開したからと言って、授業が改善されるわけではない。しかし、改善のために授業を公開することが全国の大学で普及している。授業の公開によって授業の改善が進むと思えるのは、授業者が襟を正す効果を狙ってのものである。確かにこの効果はあるだろうが、この程度のもので授業改善が進むのならば苦労はない。本当に授業を改善しようとするならば、授業を他の教員に見てもらい、その後に参観者たちと検討会をすることである。この検討会抜きに授業改善は進んで行かない。

「公開授業と検討会」が授業改善に役立つツールであることは、頭の中では誰もが分かっている。しかし、自分の授業を公開して検討会をする気になるかというと、ほとんどの教員が二の足を踏む。では、どうしたらいいのだろうか。

山形大学の「公開授業と検討会」は、授業を公開する授業者だけの改善を目的とはせず、参観者の授業を改善することも目的としている。これで「相互研鑽」の理念が「公開授業と検討会」にも生かされてくる。参観者も授業参観や検討会を通して、自分の授業を振り返って見ることが大切なのだ。そうでないと、授業者の授業の悪い点ばかりに目が向くようになるし、検討会でもその指摘に終始する危険性が大である。大学の教員は批判力に長けた人ばかりなのだ。

公開授業において、参観者は教室の一番前の席で授業を受けてはいけない。後の席で学生は寝ているかもしれない

のだから。「公開授業」は教員の教養を深める場ではなく、授業改善の場なのである。学生が理解しているかどうか、学生の視点に立って授業を分析することに務めることである。

検討会で心がけることは、明るい雰囲気を保つことである。そのためには意識的に授業者を褒めることである。少なくとも第一声は褒めるということを義務付けてもいいくらいである。心配しなくとも大学であるからオベンチャラに終始することはない。授業改善は持続力がものを言う。「公開授業と検討会」を大学内に普及させ、それを持続させるためには、授業改善に役に立つものであると同時に、明るい雰囲気がなければならない。山形大学ではこうしたことを教員に周知するようにしている。

ＦＤネットワーク

二〇〇四年、山形大学は山形県内の国公私立の大学と短大に呼びかけてＦＤのネットワークを立ち上げた。こうして出来たのが、当時としては全国でも珍しいＦＤに特化した、〝樹氷〟[3]である。山形県内の六つの大学・短大からなる〝樹氷〟は、「学生による授業評価」など山形大学がそれまで蓄積してきたＦＤのノウハウを他大学に技術移転するかたちで設計された。〝樹氷〟はその年に文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代ＧＰ）」に採択された。その資金をバックに三年間の活動を行った結果、各大学にＦＤが定着し、それぞれの大学で独自の展開を見せるまでになった。三年という短期間での発展は、当初こちらが予想したものよりもずっと早いものであった。

二〇〇八年四月の大学設置基準の改定によってＦＤが義務化された。この義務化で困るのは小規模の大学や短大である。そこで山形大学は〝樹氷〟の経験を生かすことを考え、東日本地域の大学に声をかけて、東日本地域の国公私立の三五の大学・短大・高専からなる〝つばさ〟を設立した。[4]〝つばさ〟の体制やＦＤの事業内容はほとんど〝樹氷〟の時と違いがない。山形大学においても新規の事業に取り組んでいるわけではない。「学生による授業評価」や「公開授業と検討会」など、これまで山形大学が実施してきたＦＤを提供しているだけである。このように、傍から見るのとは違って、山形大学の負担が増したわけではない。

ＦＤネットワークによって何が生み出されるのだろうか。それは緒についたばかりで明確には答えられないのが正直なところである。だが、他者との付き合いによって自分の

大学を再発見することが一番の収穫なのではないだろうか。そうしたことが今起こりつつある。

〝つばさ〟はいつでも参加を受け付けている。参加費も年会費もないので気楽に加盟していただきたい。

さいごに

山形大学はほとんど全てのＦＤ活動を他大学に開放している。本年の八月に実施した「ＦＤ合宿セミナー」は、北は北海道から南は沖縄まで三九の国公私立の大学・短大・高専から六三名の参加があった。「ＦＤワークショップ」にも四一大学等から五六名の参加があった。東北の一地方大学に全国から教員が参集し、教育について論じることができる機会を持てることは、山形大学にとってとても幸せなことである。

ＦＤの成果はどうなんだ、と問われる。成果主義に反対の人たちまでがそう問う。山形大学ではＦＤの公開性によって、教育に対する教員のオープンマインドが進んできた。こうした風土の醸成がもっとも大きな成果である。そして共有化が進み、学生との双方向的な授業改善が進み、魅力的な授業が新設されるまでになってきた。学生の満足度も上昇している。

もちろん道半ば、いやスタートしたばかりである。これからも自由闊達に議論し、連帯して教育改革を進めて行こうではないか。

注

（1）『山形大学教養教育改善充実特別事業報告書　―教養教育　授業改善の研究と実践―（平成一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九年度）』、山形大学教育方法等改善委員会（前・教養教育研究委員会）編、山形大学発行、二〇〇〇、〇一、〇二、〇三、〇四、〇五、〇六、〇七、〇八年

（2）ホームページ「豊かな授業をめざして―山形大学による授業改善の取組―」（http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/kaizen/ksite/index.html）

（3）『〝樹氷〟ＦＤ研究年報やまがた（平成一六、一七、一八年度）』、ＦＤ協議会〝樹氷〟編、山形大学発行、二〇〇五、〇六、〇七年

（4）ホームページ「ＦＤネットワーク〝つばさ〟」（http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/tsubasa/index.html）